
Thousand Tambourines

GATS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Thousand Tambourines

【Nコード】

N5867C

【作者名】

GATS

【あらすじ】

葛原成一は見た目は普通の高校生。過去の自分を恨み、今の自分を嫌悪して、それでも過去と決別することも現在を変えることも出来ない負け犬。繰り返し繰り返し沈んでいく彼の目の前に「変革への扉」が現れる。扉の向こうに広がっていたのは自分の常識では図れない異常で、そして誰もが一度は憧れるだろう世界だった。再び胸を張って歩くため、成一は扉の向こう側へと飛び込んでいく。

第零打目：落伍者の言い訳（プロローグ：起点編）

ああだこうだと悩む前に体が動く。

偉そうな文句を垂らされる前にコンクリートに悪は沈んだ。

あの時の俺はヒーロー。悪は挫いて弱者は救わない、カッコ付けたヒーローモドキ。

俺の行く先々には血と争い、倒れたヤツラが死屍累々。

死して屍拾う者は無く、救いよりも復讐報復。

けれどヒーローは負けはしない。

どんなヤツラも必殺滅殺負けはしない。

そんな風に本気で思えたのは二年ちよつと前まで。

巻き添えにした二、三人の男と一緒にノびていた俺の目に微かに写った赤い光。

どんなヤツラにも負けなかった筈のヒーローモドキは、まず数の暴力の前に倒れ、公権力の偉大さを前に自らの愚かさを思い知る。

ただでさえ多かった俺を厭う視線は増え、僅かに残った居場所は死んだ。

あの頃の俺は、本気で自分が「世界をブン殴っている」と信じてい

た。

あの頃から俺は、自分如きでは「世界などブン殴れない」と信じている。

未だ残る、一欠片のヒーローモドキの残骸を胸に抱きながら。

「葛原^{くすはら}つてさ、空手やってるって聞いたんだけどマジ？」

未だにこんな質問を受ける辺り、昔の俺はそれなりに有名人だったのだと実感する。

そしてそれは否応無しに当時のヤンチャ坊主を思い出してしまふので良い事ではない。

「やってるじゃなくて、やってた、だけどな」

こんな返答をするのも何度目だったか。

最初から数えてもいないが、目の前に「葛原^{くすはらせいいいち}成一生涯発言リスト」など見せられても数え直すのが億劫になる程度には同じ言葉を返した。それだけは感じている。

「強いのか？」

誰が、という主語が抜けているのにも慣れた。

まあ素人が格闘技をやってる奴に対して質問する場合、高確率でこんな言葉が出てくるのだと思う。

「素人よりは」

「ふん」

それきり興味を失くしたのか、頭を鮮やかな茶色に染めた、あまり頭が良さそうには見えない同級生は目の前から去っていった。少し

だけ彼を目で追ったが、教室の入り口近くで溜まっていた友人らしき集団に対し何かを報告している。その時点で興味が失せた。

孤独と言えるほど独りでいるわけでもないし、孤独を愛せるほど捻くれた生き方はしていない。

けれどたまに自分以外の全ての人間の存在が煩わしくなる。

過去を成したのは自分だが、今ではその自分を呪いたくなる。

異物は異物だけの世界で生きられれば良い　　そうやってどうにもならぬことを考えて妄想に浸るのも、何時も通りだった。

そんな日は例外なく機嫌が悪くなる。

二年前を境にあまり足を踏み入れなくなったゲームセンターへと足を向け、溜まった鬱憤の何もかもを吐き出してしまいたくなる。それが解決手段ではなく逃避であることも忘れたいから。

下手糞な攻撃を弾かれいなされて、逆に芸術的過ぎて気持ち悪い連撃で大の字にノびる。

リアルリアルファイトゲーム本物の殴り合いは得意だが架空の殴り合いが苦手なのは変わっていない。

置いてあるゲームと配置が変わった。それ以外は全てが二年前と同じで、逆に鬱憤が溜まる。

7回返り討ちにあってから店から出た。

忘りたい。忘りたい忘りたい忘りたい忘りたい。
忘れることができないのは、それだけ怠惰な生活を送っているかに
他ならない。

そのことも分かっているのに、いざという時に言い訳ばかりが頭の中
に浮かんで、結局変えることが出来ない…典型的な負け組の考え方。

退屈なこの日常が吹き飛んでくれれば、壊れてくれれば良い。

都合の良い考え。自分の都合しかない考え。

そうやって変革を望みながら変革を起こせない負け犬の姿を確認し
てから家に帰って、それでまた朝が来て、大筋が同じ毎日を繰り返
す。

その時、自分の胸に残っていたヒーローモドキの欠片が疼いた気が
した。

気が付けば左手に裏路地があつた。

ぼんやりと光っていた。

気になった。

足を踏み入れた。

扉があつた。

抽象的な表現じゃなくて、文字通り扉があつた。

ぼんやりと、妖しく光る扉が。

切っ掛けさえあれば自分を取り囲む世界は結構簡単に壊れてくれる。
こんなことに気が付いてしまうのは相当に幸せな馬鹿か、とことん
不幸な人生の落伍者だけ。

俺は、きつと

第一打目：メルヘンと気違いは紙一重（プロローグ：起点編）

戦い始めたのは何時からだっただろう。

俺の親父 既に死んでいる が習得していた空手、のような格闘技。確かに特徴や基本は空手のソレだったが、細かい部分には差異があったと思う。

というか空手と銘打っている癖に他の格闘技の技術を平気で取り入れてあるという時点で厳密に「空手」と呼ぶことは出来ないと思うのだが、それでも親父は空手と言い張った。

「強者の基本は空手だ」とは親父の口癖だったか。

俺は小さい頃から親父にそんな空手モドキを叩き込まれた。

体や技術だけではなく、しっかりと武術を修める者の心も。

強いからこそ、力の使い道は選ばねばならない…その言葉も今は遠い。

幼い頃の精神教養は無駄に終わり、俺は自身と世間の正義の為に他者を叩きのめす凶者となっていたのだから。

その扉を潜ったとき、まず感じたのは違和感。

それはあまりに不思議な感覚で、言葉に出来るようになしつかりしたものではなくて…「扉を潜った」という事実が体に刻み込まれているのに、その感覚を頭が理解することができない。

気持ち良いわけでも気持ち悪いわけでもない、ただただ何かが変だ

という認識だけが広がっていく。

次に感じたのも違和感。

しかしその違和感はただただ抽象的で不可解なだけのさっきのものとは違う、周囲を見渡してみte感じた、今度は体ではなく頭が明確に感じ取った。

路地裏にあった妙ちくりんな扉を潜った先はやっぱり路地裏。扉を潜る前から見えていた光景。

しかし同じだったのは形だけ。

路地裏を作り出しているビルの群れに光が無い。

ゲームセンターを出たのが19時にも満たない時間で、この場所に至るまでそこまで時間は経っていないのだから…少なくとも19時前か19時過ぎか、少なくとも都会の光であるビルの照明が落ちるような時間ではない。

それが一つや二つなら納得できたかもしれないが、この路地裏から見えるビル全て光を失っている。

そして次に気が付くのはビルの光と共に闇を削っていたカーライトが目に入らないこと。疑問を抱いて路地裏を飛び出すと、今の時間が日付が変わった深い夜であるかのように車の姿を見かけない。

目が慣れれば次は耳。光と共に喧騒すら失われている。

けれどこの異常な光景に「闇」を感じないのは何故か…そう思ったところで空を見上げ、凍りついた。

月がある。月だ、あれは月。「あれら」は月だ。

月が五つに増えていた。

「…スモールグール？」

増えたモノに対する感想としてはかなりズレたものだとは思っが率直にそう思った。

そして五つの月は成一の見知った月とはまた違うものだった。

五つの月はそれぞれ異なる色をしており、赤、青、緑、茶の月が一つだけ大きな銀色に輝く月を囲っている……しかも普段見ている月のサイズとは違い、まるで大気圏の内側に存在するかのごとく月が大きく見える。

ここまでカラフルなら月であると判断する前に別の光源か何かと勘違いもしそうだと考えたが、目を凝らさずとも無数の歪なクレータ―に覆われた表面が確認でき、それが五つの光源を「月である」と判断させる。

そして五つの月に目が慣れれば、今度は空全体を眺める。

都会の夜空は黒く濁っている筈なのに、今の夜空はまるで月という宝石を使ったアクセサリーを装飾するかのように、写真でも見たことが無いほどの星の海で輝いている。

地上の光は無く、ただ天の光が夜を照らす。

「……凄いな」

成一自身「もつと気の利いた感想は出てこなかったか」と後悔するくらいにシンプルな言葉。

しかしこれほど美しい光景を成一は見たことが無い。己が目でも、テレビや雑誌の複製でも。

幻想的と評することすら陳腐に考えられてしまうようなその光景に、確かに心を奪われている。

その扉はひたすら怪しかった。

逃亡中の殺人犯くらいしか好んで通りそうも無いような薄暗く薄汚

い路地裏に立っている。

何故かぼんやりと青白い光を放っている。

極め付けは、注視しなければ分からないほどだが…僅かながら浮いている。

勿論成一はこの光景を夢だと疑った。二年前から感じている過去からの抑圧も、一年前から感じている現実からの圧迫も、先のゲームセンターで思い出したかつての感覚も、それらの確かに感じていた感覚すら朧気になってしまふほどに現実感の無いシニールな場面。

しかし、不思議と扉の放つ光に魅かれる。

直ぐに魅かれる理由が現実逃避だと気付き自己嫌悪、それでも扉に魅かれる自分を止めることが出来ない。

夢なら自分の意思でどうにかできることじゃない、そう思えば一人歩きする自分の心にも少し納得できる。

金色のドアノブを掴む。金属のドアノブ特有の冷たい感覚は無い。

ドアノブを掴んだ手を時計回りに捻る。抵抗は無い。

押すか引くか一瞬だけ迷い引く。キィ、と付いてもいない蝶番が軋む音が聞こえる。

そして開かれた扉の向こうには……裏路地が見える。

だが何故か落胆は無かった。

「扉を潜れば分かる」

何が分かるのかは分からない。しかし不思議な確信があった。

いつそのこと、この扉が異世界への入り口あってくればいい…そうとまで考える。

未だに成一はこの一連の出来事を夢だと疑っておらず、この夢での行動を現実逃避と開き直っている成一に思考のリミッターは存在しない。考えるまま望むままに行動するだけ。

だが扉を潜った時の違和感が、夢と信じ鈍っていた成一の五感を覚醒させる。

そして判断する…この扉は、現実のものだった。現実のものであつてしまった。

だがほんの数分前のそんな思考も今の成一の頭の中には存在しない。何時もと違う街と空の風景を、ゆっくりとした歩みで楽しんでいる。

葛原成一は変革を望んでいる。過去と決別するために、現実打ち勝つために。

しかし「望んでいる」というだけであつて本来最も必要である筈の本人の努力がそこには存在しない。

成一の望む変革とは「努力せざるを得ない状況」になってくれること。

自分の心情や状況に関係なくそうせざるを得ない拘束力を発生させてくれる変化。余計なことを考える暇の存在しない何もかもが行動と衝動で埋まってくれる日常への渴望。

閉塞された状況から抜け出すには相応のエネルギーが必要であり、今の成一には決定的に欠けている部分。だからこそ成一は変わってくれることを望みながらもその場から動けないでいる。

しかし天は自ら助くる者を助く。歩かない者の周囲の風景はそう簡単に変わるものではない。

そしてこの異界の風景は成一に変革を促すような性質のものではなかった。

しかし常に心と頭と内臓を蝕む過去と現実からの抑圧を忘れることができる、それくらいにはエネルギーがあつた。あまりに非現実的なこの状況に、成一は感動を覚えている。

暫く歩いて気が付いたことが一つ。

ここには人の気配が全く無い。

かつての成一は一步間違えれば命の奪い合いになつてしまうような殺し合い手前の喧嘩など日常茶飯事であり、そういった状況では五感だけでなく第六感とも言える直感という不確かなものでさえ総動員しなければ無事には帰れない。

結果として成一は静動問わずモノの気配に非常に敏感になつた。

その感覚を持つてしても人の存在を感じ取ることが出来ない。

本当に遅い時間帯ならばそれもあるかもしれない、しかしここは「人の居た形跡」すら感じ取ることが出来ない。それは直感や感受性の類で感じ取るものではなく、目に見える確実な光景として認識される。

天から降り注ぐ光だけではここまではいかない。

道路も、歩道も、ビルも、木も、何もかもが生まれたてのような美しさを保っている。

きっと誰も触れていない、触れないようにしなければこんな状態は維持できない。

人が作つた領域でありながら人の関与が見て取れない、これもまた異界故か。

しかし成一の中では既にここが異界であろうがなかるうが、夢であろうが現実であろうが関係なくなっている。

ここが一体何なのか、そもそもここから抜け出すことができるのか、それすら頭に無い。

時間が許す限りこの世界に抱かれていたかった。

轟音。

鈍く地の底から這い上がってくるような不気味な振動と甲高い何か
が割れるような振動。

その二つの波形から成一はその轟音を爆発音だと判断する。

「爆発音？」

あっさりと辿り着いた自分の結論へ新たに疑問符が貼り付けられる。
何故爆発が。そもそもまだ爆発音だと決まったわけでもない。

少なくともこの場には感じられないが、他の場所には人がいるの
だろうか。

火の無いところに煙は立たないという。ならば何も無いところに音はしないというものだろう。

この異界は、ただそうあることだけで成一にとっては十分な世界だった。

だが何かあるというのなら見てみたい。この異界のことをもっと知りたい。

最早成一の頭の中には現実や日頃の抑圧など影も形も無い。

再び轟音。

今度は腹の下まで良く響く。さきほどよりも音源は近い。

爆発が…その原因が、動いている？

それは生き物なのだろうか。

だとすれば、こんな世界に住まうのはどんな生き物なのか。

人か、そうではないのか。

衝動に駆られるまま足は音のした方向へと向けられる。

それが自身の望む変革に近いものであると成一は気が付かなかった。

無残だった。地面は砕かれビルには穴が開き電柱は折れていた。

それが爆発であつたかどうかは分からないが、そのくらいでないとここまでの破壊は不可能だろう。

バチと音を立てる電線にビクリとしながらも、成一の目と感覚は音源を捜す。

人の居ない場所の電線に何故電気が走っているのかまでは頭が回らないのは、それほど成一の頭の中が熱くなっている証拠である。

しかしこの惨状は何だ、まるで戦争が起こつたようではないか。

如何に自分が変革を望んでいるとしても戦争が起こってほしい、とまでは思っていない。

重要なのは「まるで戦争でも起こったかのような破壊痕がこの異界に存在する」という事実。

『何か』ある。『ここ』には絶対に『何か』があつて『誰か』がいる！

正体も何も分からないから『何か』『誰か』と抽象的な表現をするしかない。

理解できないものが近くにあるかもしれないということが…嬉しくて溜まらない。

そうやって興奮が最高潮に達しようという時だった。

成一は弾かれたように上空を見上げた。扉を潜った時のような違和感を、空に感じた。

異界の夜空は相変わらず五つの月と星の海が美しい。美しいが、成一の視線は一瞬で夜空から銀色の月に浮かぶ黒い影へと移る。

真っ黒な、太陽の黒点のように見えたのはそれも一瞬。どれだけ綺麗でも夜を削りきるにはあまりに淡い星月の輝きは、月を背に空を飛ぶ人間を黒で覆い隠すには至らない。

そう人間だ。人間が飛んでいる。

流石に遠く、顔は愚か性別すらも判断は出来ないが人間であることは分かる。

…何となくそのシルエットが普通ではないようにも見えるが。

怪しい扉の向こうには月が五つ。星の海。人の気配は無く、汚れが無い。

そんな世界で存在した人型　まだ人であるとは分からないから　は空を飛んでいる。

益々異界という名称が似合ってきたではないか。

如何に非科学非常識に触れ続けたとはいえ新たに出現した非常識に対してあまりに落ち着いた自分の反応に、成一は頭の片隅で「自分の頭は壊れているのかもしれない」と疑い始めている。

影がほんの少し動いた。チラリと人型がこちらを見た気がする。

動揺した。自分ではなく、空に舞う影が。

先ほどと変わらずこちらからは相手の顔も性別も分からないが、影の拳動は明らかに動揺し混乱した者のそれだった。

やはりこの世界に人は存在せず、その世界に人が紛れ込んだという現実を確認して混乱している…といったところだろうか。ならばあの影は人型であって人ではないということなのだろうか。

そしてあの人型が先ほどからの爆発音、そしてこの破壊痕を生み出した本人なのだろうか。

轟音。

今度は何かを挟んだような間接的な振動ではなく、足元が覚束なくなるほどの…否、三半規管を激しく揺らすこの振動は確かに音。だがバランスごとこちらの体を持って行こうとするこの振動は音ではなく、単純な「衝撃」である。

何故ここまで断言できるのか、それは今回は音源がハッキリしているから。

音の壁にぶつかったかのような凄まじい音に耳鳴りが続いて、頭の中が否応無くかき回される。

しかし後頭部や側頭部を殴られるよりはマシだと体を向ける。再び違和感を感じた、その方向へ。

その違和感は扉を潜った時、空飛ぶ人型を見つけたときとは比にならない。

違和感の主は熊の体、鶏の頭、そして巨大な猿の腕を持った異形だった。

見た目からして違和感…というレベルではない疑問を感じるだろうが、成一の頭の中を占めるのは目の前の異形に対してザラつき粟立つ自分の精神状態。

何故あんなものが存在している。

見た目が異常だからではない。理性ではなく本能があゝの異形を否定している。

あんな、ものは、存在、しては、いけない。

熊鶏猿と目が合った。一瞬で精神だけでなく肌まで粟立った。

二秒ほどでこちらの姿を確認した熊鶏猿は姿勢を低くこちらへと走

つてくる。ヤベえ速え。

息を吐く暇も無く熊鶏猿が腕を振り上げ、届く筈も無い距離から右腕をフルスイング

「畜生忘れんじゃねえよ！！」

思わず叫びながら体を仰向けに倒す。相手の腕の異常な長さで太さは最初に確認済みだった。

明らかに体の大きさとバランスの合っていない長大な右腕は、ただ力任せに振るうだけでスピードも威力も出ない筈の無駄な攻撃を信じられないような速さで繰り出し、咄嗟に倒れこんでその一撃を回避しよう試みた成一の前髪数本と周囲の空気を巻き込んで今まで聞いたことの無いような出鱈目な風切り音を生み出し、その勢いに振り回されてバランスを失ったらしい熊鶏猿がマヌケにも地面に転がった。

巨腕が己の目の前を通り過ぎていった後、全ての動きがスローに感じられる。

もう何十秒も経過しているように感じられるのに未だに倒れこんだ自分の背中が地面に辿り着かない。

まともに喰らえば死んでいたかもしれない…そんなことを考えた途端、下半身の筋肉と涙腺が緩む。

それを感じ取った瞬間に背中が地面にぶち当たる感触、そこから走る痛み　後頭部が地面と衝突する寸前に両手を地面に叩きつけ、

肩を支点に勢いそのまま頭を両腕の間に潜らせるように体ごと回転そのままバック転の如く両足を地面へ着けた。

地に足が着いても勢いは死にきらず重心が安定せず転びかけるがなんとかバランスを取る。

畜生チビリかけた。

永遠にも感じられた一連の動きだが実際に経過した時間は一瞬、成

一が体勢を整えても熊鷄猿は未だに地面へと転がったまま。
一瞬安堵しかけるが相手の初弾を避けただけ、事態は好転してはいない。

相手のスピードと間合いを考慮、逃亡は不可能。

ならば死中に活。打倒できずともダメージを与えれば、或いは。

相手の正体は分らないが生物であることに変わりはない筈。ならばやれないことは無い。

成一は覚悟を決めると左足と左手を前に中段の構えを取る。

これがグローブ付きの試合ならばボクシングでよく見るガードを上げたオーソドックスな構えを取るが、裸拳相手の喧嘩をすることが多かった成一は正面から止めるガードよりも横からいなす、もしくは避ける受けを重点的に使っていた。

それに熊鷄猿のあの異常な腕：ガチガチに固めても、まともに腕で受ければ両腕共に粉々になるだろう。

ようやく立ち上がろうとする熊鷄猿。尻目に呼吸を整える成一。

二回の深呼吸で恐怖と興奮で硬直しかけていた筋肉がほぐれる。体の全感覚が目の中の異形へと集中する。

如何に力が強かろうと相手は一匹、集中すれば！

なんとか立ち上がった：立ち上がりかけた熊鷄猿。攻め込むには絶好の機。

前傾した姿勢、全速力で相手の懷に飛び込む。

熊鷄猿が猛スピードで向かってくる成一の姿を確認した頃には、既に間合いの中。

その腕は長大過ぎる故にリーチが長く、リーチが長過ぎる故に接近戦^{イト}には弱い。

互いの足と足がぶつかろうとするほどに近く、強く踏み込む左足。

それを支点に回る足首、膝、腰、肩、それより先の手は強く固められた左拳。

迎撃…を行なうには近すぎる。それを認識した時、成一は回転する独楽。

しかし回転し切る前に凶器と化した拳が、鈍い音と共に熊鶏猿の左脇腹に突き刺さった。

成一の拳に返ってきたのはなんとも言えない感覚。

固いような柔いような、少なくとも今まで叩いてきたどんな人間の腹とも違うということだけ分かる。

そして今重要なのは曖昧な感覚に付いてではなく、僅かでも動きの止まった相手のこと。

そう、相手の動きが止まっている…程度は分からないが、効いている。

機。逃がせない。

突き刺さった左拳を腕ごと引き、今度は右。

クロスレンジ

ボディブローが有効打となるほどの近距離では中段突きや上段蹴りなどのある程度距離が必要な技を放つことはできない。故にかつての百戦にて培った練磨の状況判断能力はこの場で最も有効な打撃を判断し、実行する。

踏み込んだ左足が踵を支点に半転、そのまま左足に全体重を預けるかのごとく低く自らの体を落とし…右腕だけが高く、縦に振り下ろすような大振りの一撃の姿勢となっている。

スウィングブロー

相手が人間ならば顎先を捕らえるようにショートアッパーを撃っているところだが、生憎相手の顔には叩き易そうな顎は存在しない。ならば顔を潰してやればいい…さっきのボディが効いているのならば、直撃すれば距離を稼ぐ程度の隙は生まれ

衝撃痺俺の体浮いて何が起こって

突然訪れた『何か』によつて頭の中がゴチャゴチャと落ち着かず、考えを整理する前に背中が強かに何かに叩きつけられた。

また衝撃。一瞬で全身を駆け抜ける稲妻か電流のような痛み。

一瞬とは言えどあまりの痛みの大きさに意識が飛び、視界が白く染まる。

だがそれも一瞬。しかし一瞬の痛みが治まれば鈍い錘のような痛みが背中から伝わってくる。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛痛畜生。

叩きつけられたのがビルの壁で、指一本も動かすのに難儀するくらいのだメージを負っていると確認したのと同じ時。痛みでぶれる視界の先に腕を押し出すように振り切った姿勢の熊鷹猿が見える。

確かにあの場で長大な腕を持つ相手にまともな攻撃など望めなかつたろう。故にこの場合は押し出すようにして距離を取るのがベストと言えなくも無いだろうがこんな結果は出鱈目で反則。

第一押すにしても距離が無ければ100%力を出し切れないのは同じ筈。なのにこの結果。

異界にいた異形は、異界の異形らしく異常な力を持っていた。

結局ボディは効いていなかったのか。それともさっきのは苦し紛れの一撃だったのか。

少なくとも、こちらの姿を確認してゆっくりと迫ってくる相手の姿からは何も読み取れない。

相手が人間なら痩せ我慢か本当に効いてないかの判断には自信があったのだが。

そう、自信があつた。

指程度は動かせるようになったが、未だに足先がこちらの命令に反応しない状況では逃げることも叶わない。そして相手に『その氣』があるうとなかろうと、あの巨大な腕の一撃をともに食べば骨ごとミンチ肉60数キログラムの出来上がり、というわけだ。

俺は、多分、死ぬ。

なのに、何も感じない。

「ああ死ぬのか」と漠然と感じるだけで、胃に少しだけ重さを感じるだけで、他には何も無い。

寧ろ、さつきは何を必死になっていたんだろうと言う思考すら浮かんでくる。

おかしいな。俺はもっと何事にも執着する性分じゃなかったっけ？

それも昔のことだ。

己の問いに己で答えた時、そういうことだったかと納得した。

今の俺には生きること執着する理由すらないことに。

今更二年前に失くした自分の欠片がどれだけ大きいものだったかを思い知った。

最後の最後に、こんなに良い景色を見れたんなら上出来か。

成一は空を見上げ思う。

宝石みたいな五つの月と夜の黒を削る数多の星の空。

なんとなく、生まれ変わるならあの空の中のどれか一つになりたい、そう思った。

熊鷄猿が地面を蹴る音が聞こえる。

視線を上から前へ戻すと、異形がトンでもないスピードでこちらに向かってくるのが見えた。

目を閉じようかとも思ったが、どうせなら最後まで異常な連中のことを見つめていようかと思いが勝った。

これが俺の見る最後の景色。異形の異様な腕だ。

熊鷄猿はまたも距離感の狂いそうになるようなところから腕を振りかぶった。

そうして、異形の異様な腕が異常なスピードで俺の顔面を

爆発した。

何が爆発って目の前が爆発した。

俺の顔が爆発したかと思ったがじゃあなんで俺は生きてるんだ。

同時に巻き起こった爆発音は服から周囲のビルから何もかも揺るがせるような大轟音だった筈なのに、振動する鼓膜に痛みや不快感は無く、まるで最高のヴァイオリンで最高の音楽を奏でる最高の演奏者の……途中まで考えてあまりに似合わない喩えを止めた。とにかく不思議な音。大き過ぎる音なのに何も障害しない。

しかしそんな音の余韻に浸る暇も無く、今度は間違いなく不快な金切り声が聞こえる。

耳を塞ぎたかったが、今の自分は腕を上げることすらままならない

状態であることを思い出した。
金切り声の主は 熊鶏猿だ。

何故突然爆発した？

考えを巡らせようとして、上に違和感を感じた。

それは、月を背景に空を飛んでいた人型の気配。

そしてその違和感が移動するのを感じ…目の前に人が降り立った。
違和感も、目の前に移動した。

目の前の人型は…少女の形をした人型の姿に成一は絶句した。

「フリフリヒラヒラとあまり露骨なわけじゃないけど鮮やか艶やかじゃないけどメルヘンメルヒェンでその色彩はなんだろう綺麗なんだけどそれを着るっていうのは勇気とかのレベルじゃなくて羞恥心あるのなのどっちなの寧ろお前世間体とか周りの目とか気にしたことあるのつかその手にした裝飾棒は一体何かしらステッキかステッキなのか畜生め」

混乱しているのは自覚している。

空を飛んでいたのは少女。

その姿は、子供の時分にテレビの中で目にした魔法を使う女の子。

目の前の人型は、それとまるきり同じ空気と衣装を纏っていた。

夜空が輝く異界。

爆発で起きた火で燃え盛る異形。

金切り声が響き続ける中、目の前で怒っているのは異常。である。

第二打目：若年性健忘症（第一章：異界の住人）

妙な夢を見た。気がする。

何か凄いものを見たというのは分かっているのに、肝心の内容は思
い出せない。

怪しいものを見た気がする

綺麗なものを見た気がする。

怖いものを見た気がする。

でも、内容は思い出せない。だから、気がする。

いい目を見ても悪い目を見ても、それは夢。だから肝心なところは
曖昧。

夢だから、そんなものだと思う。

…なのに、何かが引つかかるのは何故だろうか。
忘れてはいけない、忘れたくないものがあつた。

何故それだけ覚えているのだろう。

何故。

桜色の開花の季節は終わり、新緑生い茂る育みの季節。

新しい環境にも慣れ始めるか、慣れるのを諦める時期。

葛原成一にとつても自分の過去を知る人間と知らない人間の区別が付き、知る人間の哀れみか蔑みを含んだ視線から如何に逃げるか、その有効な手段を選定し、習慣とする変化が落ち着きを見せ始める時期でもある。

元より人付き合いが苦手なわけではないが、親しくなった相手が自分の過去を知つてどう思うか。そこでの反応やら遣り取りが面倒で、級友たちとは必要最低限以外の交流は避けている。

だから、成一が昼休みに一人で弁当を食べている光景も珍しいものではない。

ただしそれが人目に映るか否かは別である。

場所は校舎裏に程近いフェンスに面した通り。庭とすら呼べない寂れた場所。

今はもう使われていない茶色く錆び付いた焼却炉と、高くそびえるフェンスの壁。

後は申し訳程度に小さな花壇が設置されている程度。その花壇も草が生い茂り土の色は見えない。勿論花の色も。

成一の通う三条学園の中庭は花壇が色鮮やか。裏庭は木々と芝生の緑が目優しい。どちらも現在の過ごし易い気候の中では学生達の憩いの場となっている。

しかし成一のいる通称・廃墟通りには滅多な事では人は寄り付かない。

何か目に優しい、心が安らぐようなものが無いのは分かるし、実際太陽が頭の真上に鎮座している昼休みにおいてもどこことなく雰囲気は暗い。とはいえそんな場所なら後ろ暗いことをするにはうってつけな筈。

しかし人は来ない。そして誰もそれを疑問に思わない。

詰まりは、それくらい寂れた場所なのだと判断した。何にせよ成一にとっては人が寄り付かないのはいいことである。

成一はその日も好物の緑茶をお供に、慎ましく昼食を摂っていた。

のだが。

視線。これ以上なく分かり易い存在感。

元より人気の無く「動」の無い場所、人が来ればその気配は何よりも目立つ。

ましてや成一の直感は同年代の人間のそれとは比べ物にならないほど鋭敏にして敏感、同時に気配を隠す・絶つ術など身に付けてはいないだろう人間の気配を読み取るなど集中を発揮させるまでもない。

なんともなしに左を向く。

視線の先にいたのは女生徒。

小柄で、茶髪。しかしその色は上から重ねたものというより、元から黒が薄いためであるように見える。そのくらいには自然な栗色。そして成一はその女生徒の顔には見覚えがあつた。

「…結城？」

クラスメイト。

名前は確か、結城紅葉^{ゆづきもみじ}。

確か、と絶対の自信があるわけでもないのは、成一が他者に無関心

であり、同時に接触を避けるように生活しているのが一つ。

もう一つは、件の結城紅葉の存在感の無さによるもの。

話をしたことがない……というのならまだしも、成一はそもそも彼女の声すら聞いたことが無い。

視界に映る時、彼女は大抵一人でいるか、お節介な他の女生徒に囲まれて困ったように笑っているか、だった筈。

しかもその光景すら曖昧に思えるほど気配が希薄なのである。

そう、気配が希薄。

人の気配には敏感な成一であるから、人間の持つ空気や気配は一人一人微妙に違うことを知っている。

それは感じ方や匂いの違いだけでなく、小ささ大きさ、重さ軽さという差異も存在する。

そこに当て嵌めるなら、結城紅葉の気配は栗鼠^{リス}の如く小さく軽い。

数人の集りに紛れれば「そこにいる」と示さなければ気が付かないほどである。

とはいえこうも寂れた場所であるから、そんな人の気配でも現れれば嫌でも目立つ。

相手も成一の視線に気付いたようで、ビクリと体を震わせると顔を伏せて俯いてしまった。

成一は、相手に聞こえないように小さく溜息を吐いた。

恐らく彼女はこの場所に何らかの用事があったが、ここに俺が存在していたために固まってしまっている……成一はそう予想した。

成一は地元ではそれなりに有名であり、同時に悪名もそれなりに知れ渡っている。

そしてその詳細は知らずとも、葛原成一が「そういう生徒である」という話は必ず伝わっている。聞いた人間が望もうと望むまいと、噂話というものは知らず知らず耳に入っているものである。

見るからに気の弱そうな彼女のこと、不良の類には免疫も無いだろ

う。

もう一度、小さく溜息を…今度は少しだけ長く吐いた。

弁当は既に食べ終わり、後は紙パックの緑茶を飲み干すだけ。ならばこの場に留まることもない。

弁当箱を包むと緑茶のストローを咥えながら立ち上がり、先ほどから石にでもなったかのごとく俯いて固まりっぱなしの彼女に背を向けてこの場から立ち去るべく歩き出す。

場の空気が動く、その気配がする。

チラと後ろを見れば、彼女は驚いたような表情で背中を見つめている。

固まったままならどうしようかと考えていたが、これなら心配するまでもない。

そのままこの時間の停滞したような場所を去り、授業が終る頃には彼女のことも忘れている。

そうなるだろうと思っていた。

「……っ」

何か、聞こえたらうか。

それは虫の声にすら劣る囁きで、そもそも本当に声がしたかどうかすら疑わしい。

しかし成一は背後の気配が微妙に変化しているのを感じていた。

振り返る。

結城紅葉はまた俯いていた。
しかしその体は震えており、何か無い物を振り絞っているように感じられた。

「……っ」

また何か聞こえた気がする。

聞き取れないのは相変わらずだが、その瞬間に結城の体が強張ったのは見て取れた。

つまり、彼女は俺のことを呼び止めている、ということなのだろうか。

学年が上がってから一月、彼女と接点を持ったことは一度もないのだが、何の用があるというのだろうか。

それともただのメッセンジャーか。だとすれば絶望的に人選を誤っている。

「……っ」

また何か以下略。

もし俺が気付かずに立ち去っていたらどうするのだろう。そもそも俺が立ち止まって振り返っていることに気付いていないようだ。

このままでは埒が明かない。

成一は、今度は周囲に聞こえるほど大きく溜息を吐いた。

そのまま生まれたての小鹿のように震えている彼女へと近付いていく。

「…あのっ」

目の前まで近付いたが気付かない。

そして、ここまで近付けば彼女が何を言っていたかも確認できた。どう対応したものかと一瞬だけ迷い、一瞬後にはシンプルに行こうと結論を出した。

「おい」

「はいいいいっ！」

普通に声をかけただけで凄まじい反応があった。

彼女は文字通り飛び上がった。それも両足揃えて伸ばしたままで器用に。

一秒もかからず地面に降りた彼女は、目を見開いて成一の顔を見上げながら物乞いする鯉のように口をパクパクと開閉している。

驚いたのは分かるが普通のリアクションはできないのか

直ぐに話を切り出そうかと考え、このままではまともに対応してもらえないのか不安になる。

冗談でも混ぜて緊張を解すか…とも考えるが、先の反応を思い返し即時却下。冗談を本気にしかねない。

ならばこれは…と考えが広がり始めようとした時点で何時もは他人との接触を避けている自分が、目の前の少女と必死にコミュニケーションを取ろうとしていることに気が付き、苦笑する。

何とも可笑しい話だ。

そしてそんな成一の雰囲気の変化を悟ったのか、目の前の少女は正気に戻っている。

成一を見つめるその瞳は、少しの安心と多くの脅えの色を含んでいる。

「俺に、何か用でも？」

これをチャンス…だとも思わず、成一は普通に話しかけた。
会話するには自然な空気になったと無意識に判断したのかもしれない。

「え…あ、あの…えっと」

ビクリと体を震わせたが、先のようなオーバーなりアクションは無い。

言葉に詰まっているのはそういう性分だからだろう。

「…」

俯いて黙り込んでしまった。

しかし脅えや戸惑いからの沈黙ではなく、言葉を選んでいるからの沈黙なのだろうと成一は判断する。

緊張の雰囲気は伝わってくるが、恐怖などは感じられない。

一分ほど時間が経っただろうか、結城は決意の表情で顔を上げた。

「あの…葛原、くん」

「ああ」

何か用件を伝えるだけでこの表情。彼女は不器用なのかもしれない。そんな時期が自分にもあったと、成一は父が存命だった頃の自分を少しだけ思い出す。

「昨日：じゃなくて。昨夜は、何処にいたの？」

「へ？」

昨夜、何処に？

自分でも間抜けな面をしているのが分かるが、しかしその質問はあまりに突拍子も無かった。

何故彼女がそんなことを気にするのだ。

第一昨夜は何事も…。

「あれ？」

何事も無かった、のだろうか。

そもそも昨夜自分が何をしていたのか全く思い出せない。

学校を出て、街へ向かって、ゲーセンで少し遊んで、それから…。

それからが、何も無い。

何時家に帰って。

何時飯を食べて。

何時風呂に入って。

何時布団の中に入った？

気が付けば、布団の中で朝日を顔に受けていたのではなかったか。そう、昨夜街の中を歩いていたという過去から記憶が断線している。

「…思い出せないの？」

心配そうに結城が尋ねてくる。

しかし、その表情は心配などというレベルではない深刻な色で染められていた。

「いやちよつと待て、昨日は…街で…その後、夢の中で」

夢？

そういえば、夢を見たのだったか。

夢、夢、夢、思い出せない、夢。

全部が全部忘れたわけではないだろうが、肝心なところは思い出せない。

何故だ。街…街…街…を歩いていて、その後どうした。

街の中？

「俺、夢の中で街を…」

夢の中で街の中を歩いていた気がする。

唐突に、夢を見たという事実と昨夜街の中を歩いていた事実が繋がった。

夢の中で歩いた街の風景が現実味を増し、同時に昨夜の街の風景の現実感が薄れた。

まさか昨日の放課後の記憶は夢だったか？

「違う、あれは、本当に…」

夢とは全てが荒唐無稽で奔放なものではない。

夢は時に過去の事実、未来のビジョンを映し出す。それは現実すら凌駕するような現実味に溢れている。

しかしその現実味は外面だけの空洞。目が覚めてしまえばその存在、それに対する記憶の軽さから「あれは夢だ」つたと簡単に判断されてしまう。

夢と現実にはあった・なかっただけでなく、感覚自体に決定的な差があるのだ。

そして成一の頭の中には学校から出て行く足の間、ゲームセンターで時間を潰していたときの指の感覚、空しさに腹を立てながら店を後にした心中の感覚が現実の重さを伴って脳内に残っている。勿論得体の知れない扉を開けた時の違和感も

扉？

「あ…ああ…」

記憶が爆発する。

夢。昨夜の夢が、急激に重さを伴っていく。

扉月星夜音爆異打痛炎人

断片がグルグルと頭の中を駆け巡る。

それ故に詳細な光景は甦らず、益々成一を混乱させていく。

頭痛がする。頭痛がしない。

頭が痛い。頭が痛くない。

だってアレは現実。だってアレは夢。

現実夢現実夢現実夢現実夢現実夢現実夢現実夢現実夢
現実夢現実夢現実夢現実夢現実夢現実夢現実夢現実夢
現実夢現実夢現実夢現実夢現実夢現実夢現実夢現実夢
現実夢現実夢
現実夢現実。

「ッ…おい、結城！」

何故、お前は、そんなことを。

現実と夢の境目、記憶の逆流に苦しむ成一はその逃避手段として結城紅葉の存在を思い出す。

彼女こそがこの混乱の原因。彼女の問いかけこそが原因。

ならば彼女は何かを知っている。筈なのだ。

自分では現実と夢の境目を判断できない。ならば、彼女は。彼女ならば。

「え…」

しかし、彼女は既にこの場にはいなかった。

残っているのは僅かに届く昼休みの喧騒と小さく控えめな足跡のみ。立ち去るなら立ち去るで何か気配の変化を感じても…そう考えるが、他人の気配を察することができるほど余裕のある状態ではなかったことを思い出す。

同時に、先ほどまであれほど頭の中を圧迫していた記憶の暴走が収

まっていることに気が付く。

断片は既に頭の中に無い。何が起ったか、大まかにも思い出すことができない。

それでも覚えていることが一つだけ。

「扉」

何処かの路地裏にあつた淡く、そして妖しく光る扉。

そこに何かがある。そこで何かがあつた。

あまりに非現実的な馬鹿げた話。しかし、その扉を潜ったという記憶には現実の重さがあつた。

…今日も扉は存在しているのだろうか。

チャイムの音が鳴り響く。

気が付けば昼休みは終わり、次の授業までの五分の準備時間へと入る。

「…急ぐ」

この通りが校舎からさほど離れていないと言ってもゆっくりもしてられない。

直ぐには無理でも、問いたださなければならぬ。

結城、お前は何を知っている？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5867c/>

Thousand Tambourines

2010年10月24日03時55分発行